

子ども心を育てる

——子どものことばに耳かたむけて——

前国立国語研究所国語教育指導室・現埼玉大学教授 村石昭三

上原先生から「子どもの言葉に耳傾けて」というので話すようにということでもありますのでその通り頂だいしまして、この線にそって話してみたいと思います。

児言態は二十周年ということ、ずっと機関誌を出されていますが、特に印象に残っておりますのは『鼻血がなんでえ』という本であります。くり返して読みながら、この子供の心はどこにあるのかわかっていることで、私の心はどこにあるのかわかっているということで、私の立場から書かれていない行間をさぐっていく所が楽しみでありました。子供はもう小さな内から日本語のある種の言葉に、積極的な意味を感じたり、それからそう言われたくない消極的なマイナスの意味を感じたりということ、感じて読ませていただいております。

私の最近の本の一つに『言語の教育』という、放送大学のラジオのテキストに使っているのですが、この中にある小学生の一年か二年の子供が作文を書きまして、一番最後の所にその子供は「又、来たい

と思います。」と結んだ。そばで見ていたお父さんが、又来たいというのはおかしいんじゃないか、「又、行きたいと思います。」でないとけないじゃないかというやりとりがあるんですが、行くと来るというように対になった言葉は、子供は同じ時期に覚えるというより、少し後先があるんですね。行くが先のようにですね。作文の中で書いているのを見ますと行くが圧倒的に多いんですね。出て行くというのは積極的に外に出て行こうという意味なんです。で今日誰か遊びに来ないかなあつていう消極的な子供は、あまり先は期待できないですね。やはりこう待つよりは、どっかへ行く所に自分の生活を作っていく働きがあるだろうと思います。

先程の作文についてですが、何で子供は、行きたいと思いますというならわかるけれども、また来たいと思いますと、なぜ書いたのかと見ますと、子供の視点、どんな視点から書いているのか考えてみると、又来たいと思いますという時には、その気持ちがあるという一度プールでお父さんと遊びたいという、

その心は視点は実はこちらの方に移っている。だから楽しく遊んだプールに、心、視点を置いて書いていますから、又来たいと思いますということになるでしょう。子供を見つめていく時に、今子供はどこにいてものを言っているのか考えてみる必要がありますだろうと思います。どの位置からしゃべっているのかということですね。

次にイメージの問題についてですが、子供の言葉をみてみますと、やはり押えたいのは子供のイメージ、何をそこで子供はイメージとして描いているのかを大事にしたいと思っています。子供が話すことは、言葉をしゃべっているうちに、あるいは書いているうちに、新しい思想が、そこでどう生成されていく、そういう働きがあると思います。子供が何かしゃべる何かがあつて言う。何かがあつてそれを言葉にふりかえるということもありますが、それはすでにあつたものを言葉にふりかえる活動ですが、もう一つ、言葉の働きというのは書いていくうちに生成されていく、創造されていく働き加

ありますので、その所を大事にしたい。だから子供の視点にたつて、今子供はそこで何を考えているのか、何をイメージとして描いているのか、そのイメージが次はどういうイメージの所へ移っているのか、それを言葉を聞きながら、言葉の記録をとりながらさぐっていくことを大事にしたいですね。

親とか先生というのはいつも、子供と前を向いて話しを聞くことが大切ですね。子供の顔つきとかね、それこそ生感というんですが、それを見届けるにはやはり真正面むいていないとつかめないんじゃないかということ。

最後に、子供がどういうイメージを持ち、それがどう流れていくのか、思考に流れがありますが、もう一つ考えたいのは、流れに方向性があるということね。イメージは固定的なものではありません。それがだんだんとふくらんだりして変化してこう動いていきます。その動き方にある種の好む方向性とか、あまり好まない、あるいは得意としない方向性がある。これをプラスマイナスという形で呼んでおりますが、私達は子供を叱る時に子供が何か悪い事をしますと、親は何であんなそんな事をしたの、言つて

みなさい訳を、とこう言いますが、その訳というのは実は子供にとってはマイナスの方向性のものです。というのは前にさか上つて聞くわけです。だから子供はこうイメージが湧いて流れて行く方向性というのとはどちらかというと、これから先の方向性、つまりこれからおこり得るだろう未来の方向性、これをあなたはなぜそれをしたの、訳を言ってみなさい、訳つていうのは実はこれから先の方向性ではなくてむしろ、この前のできごとですね。これが結果であります。原因はこつちにある、時間的に前のことなんです。大人はそういう考え方で因果応報といまして前に悪い事があると悪い結果がおきる。ところが子供にとってはイメージあるいは物の考え方の方向性というのは元へもどるのではなく、先の方向へという方向にプラスの意味を感じてますから、本当は何をしたかったのか、その過程にこれがあつた。先はプラスかもしれない。何か子供は良い事をしようと思つてたまたま、これはマイナスだったかもしれない。子供の顔をよく見て、本当は何をしたかったかという問いかけがあつても良いのです。

子供にお話をきかせたり絵本を見せますと、親は終つた時点で元へもどつてお父さんは何をしましたか。その次は何をしましたかという形でもどつてくる。そうではなくて終つたらそれからどうしたんだろうと、先へもつてくるんです。読みながら次の世界を作り上げていくそういう所を考えていく必要があると感じております。私達は常にいつも子供の話から前の出来事を大人は考えがちです。むしろ会話している所から次の方向もありますのでどうぞいつも、お話をきかせたりする時、元へもどるマイナスの方向で、いつも元へもどるといふような事はやはり少し注意しなければいけないと思います。話のそれからの先という方向を考えると子供というのは表現の意欲が高まつていくだろうと思います。

最後に子供のことはといふのは、そういう意味だつたという過去の記述ではなく、むしろのびていく、これから新しいものを発見していく、そういう方向性を持ったのが子供の言葉ではないかという事を感じております。

児童の言語生態学の構想

前全国大学国語教育学会々長・広島大学名誉教授・鳴門教育大学副学長 野地潤家

一、児童言語学への軌跡と課題

綴方教育や小学校の国語教育に熱心に取り組んで

おられた、慶応幼稚舎の菊池知勇氏は綴方教育や読み方教育の基礎学としての児童言語学の必要性を感じられまして、昭和十二年、それを「児童言語学」

という書物に体系的におまとめになりました。これは、その方面の先駆的業績であります。

また、児童の使用語彙の実際にせまろうと調査を